

「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業」
実社会対応プログラム最終評価結果表

課題	疫病の文化形態とその現代的意義の分析—社会システム構築の歴史的考察を踏まえて—
研究テーマ名	医学史の現代的意義—感染症対策の歴史化と医学史研究の社会との対話の構築
研究代表者	鈴木 晃仁
所属機関・部局・職	慶應義塾大学・経済学部・教授
研究成果の総合評点：A	
研究成果の評価に係る所見	
<p>新しい医学史を構成するための、感染症アーカイヴズの構築は、とりわけ日本が感染症の対策において卓越した成果を残したことの軌跡を散逸させず資料としてとりまとめ、国際的な感染症対策に資するものとして活用させようとするという点において高い評価を与えることができるものであり、また、社会との対話における活動も一定の評価ができる。しかしアーカイヴズをどのように構築し、法的な問題なく公開するののかに関してや、2グループ（感染症グループ及び対話グループ）間の連携については、不十分なものがあるといわざるをえない。対話グループに関しては、それ自身の活動の意義はあるものの社会との相互的な交流自身が的を絞りきれていない。</p>	

※ 「研究成果の総合評点」に対する標語は下記のとおり。

- S. 研究目的に照らして、期待以上の成果があった
- A. 研究目的に照らして、期待どおりの成果があった
- B. 研究目的に照らして、十分ではなかったが一応の成果があった
- C. 研究目的に照らして、十分な成果があったとは言い難い